

## まえがき

1945年9月上旬、広島爆心地820m地点に真つ赤なカンナが咲いていた（朝日新聞社松本栄一氏撮影）。そこはそのひと月前、この地球で初めて原子爆弾が落とされた場所だった。

この記録物語は、原爆にも負けずいち早く振り返り咲いて人々に〈生きられる〉を覚えてくれた真つ赤なカンナと、現在に生きる子どもたちが繰り広げた20年の記録です。

原爆にも負けず、諦めず、真つ黒な瓦礫の中、振り返り咲いてくれた真つ赤なカンナは、絶望の淵にいた当時の人たちに生きる望みをくれたことでしょう。そのおかげもあつてか、復興は始まった。

復興の作業は容赦なく大地を掘り起こした。皮肉なことにカンナも刈り取られ、人々の記憶からも消えた。それでもカンナに宿る妖精はすべてを受け入れ、怒し、天に上がり、二度と繰り返されないように、宇宙から地球を見守ってくれていると私には感じられた。

そんなカンナの妖精は言います。

〈宇宙から見たら地球は一つのおうち〉だと。

子どもたちも〈この地球は一つのおうち〉だということを感じ取れるようになってほしいと思う。忘

れられたカンナを次の時代を担う子どもたちと蘇らせ、咲かせ、分かち合い、平和のバトンをつないでいる。そして、二度と繰り返さないために、私たちはどうしたらいいのか子どもたちと考えてきた。その旅も20年。もう私の手の届かないところにまでもつながつているように感じる。

〈カンナ・プロジェクト〉は〈一人歩き〉を始めたのです。

どこかで真つ赤なカンナの花を見たら〈カンナ・プロジェクト〉のことを思い出してください。そして大事なことは、カンナの球根を分かち合つて咲かせた人たちが、お互いに想いを馳せ合うこと。立場を超えて、宗教を超えて、違いを超えて平和の想いを育むこと。そのお互いの国や地域に原爆を落とすと言ったら、きつと「やめて！」と思うはずですよ。

お互いに持てるものを分かち合い、助け合い、意見が違つてもお互いを受けとめ合い、恕し合い、尊重し合えたならと。

しかし、この〈恕す〉は本当に難しいことです。

『孔子の弟子が孔子に尋ねました。「一言にして以て終身之を行うべきものありや」と。』

孔子は答えました。「それ、恕か。己の欲せざるところ他人（ひと）に施すことなかれ」と。

孔子が答えたのがこの〈恕（じょ）〉だったからです。「一言にして以て終身之を行ふべきもの」即ち、「生涯にわたり心がけること」ということでありますから、そう簡単には身につかないことだと言えるでしょう。』

出典：『子供と声を出して読みたい「論語」百章』岩越豊雄（著） 致知出版社 平成21年8月28日第5刷発行

私は大学・短大・企業などで「恕」を根幹に据えたマナーの講師を30年ほどしています。

マナーの根幹を〈恕〉と考えてそれを伝え、研究してきました。

そんななかで〈カンナ〉に出合わせていただいたのではないかと思います。

カンナとの出会いからさらに〈恕〉を学び〈カンナ・プロジェクト〉はまさに〈恕〉の実践活動だと感じます。

20年の歴史をつづり残し、その時々に参加してくれた子どもたちが、再びこの本に出会い、プロジェクトの全容を知ってくれることを願って執筆することになりました。

そして、この活動に賛同し、協力してくださった皆さまに感謝の思いを込めたいと思ってお名前を書かせていただくことにいたしました。この機会に、お一人お一人にご了承のメールを送ると『光栄です』『嬉しいです』とすぐに承諾のお返事が届きました。一般の方の実名をここまで書くのかとご心配くださ

る方もいらつしやるかもしれませんが、そんな思いで書かせていただきました。

カンナの妖精〈かんなちゃん〉が〈ゆるキャラ〉の体をもらって、子どもたちと活動することができるようになって学んだこと〈かんなちゃん語録〉を各章のタイトルに据えてみた。

ホームページ かんなちゃん語録よりご覧いただけます。

